

## 2219 離島覚書（鹿児島県口之島）



令和4年10月16日

### 修学旅行

諏訪之瀬島からフェリー「としま2」に乗り、口之島に向かう。

諏訪之瀬島からは修学旅行に出かける中学生、引率の校長先生と教頭先生が乗り込んだ。十島村の中学校の修学旅行は7つの有人島の1年生から3年生まで全員が参加し、3年に1回行われる。中学3年生に限ると参加人数が少ないため、ある時期から中学生全員が参加するようになったのだろう。通常は鹿児島県外が修学旅行先になるが、コロナ禍のため、行動範囲を狭めて、鹿児島県内に留めたとのことだ。

奄美大島からのフェリーは宝島、小宝島、悪石島、平島と寄港し、それぞれの島の中学生が乗船しており、これに諏訪之瀬島、次の寄港地の中之島から新たに乗り込んできたため船内の中学生は40人ほどに膨れあがった。3年に1回の修学旅行は各島の中学校が交代で担当しており、今年は諏訪之瀬島の当番だったから、同島で取材した校長と教頭に再び船内でお会いすることになった。

フェリーは定刻よりも遅れて12時05分に口之島に着いた。私の他に1名が下船しただけだった。奄美大島からの上り便で口之島に来る人は少ないのだろう。

口之島からも4人の中学生が修学旅行に合流した。また島でお世話になる「民宿なかむら」に宿泊していたダイビング客の7～8人もフェリーに乗り込んだ。

岸壁には後述する山海留学の小学生6人が修学旅行に出かける中学生を見送りに来ていた。校長先生と女性の教諭2名も一緒だった。小学生はデッキの中学生に向かって、「楽しんできてね」と大声を張り上げている。中学生はデッキから手を振っていた。

ちなみに口之島小中学校の小学生は6人、中学生は4人の合計10人、教職員も児童・生徒数と同数の10人である。

フェリーを見送った後、「民宿なかむら」の車に乗り、宿に向かう。民宿は西之浜漁港（第

4種)に面した場所にあり、船着場から数100mしか離れていない。



西之浜漁港のフェリー発着岸壁（左）、修学旅行生を見送る山海留学の小学生（右）

### 民宿なかむら

すでに正午を回っていたので、民宿の食堂でカレーライスの昼食を食べる。島には食堂がないから3食付きである。後述するように海が時化てフェリーが欠航したので、3泊4日、この民宿にお世話になった。感心なことに毎食メニューが異なり、同じものがでたことはなかった。

「民宿なかむら」は2016（平成28）年にオープンした。島で最も新しい民宿である。この他にひと山越えた反対側の傾斜地に形成されている古くからの本集落に3軒の民宿がある。このうち2軒は専業で、もう1軒は畜産業を兼業している。

民宿の経営者は後述する中村勝幸さん（59歳）で、2人の息子も手伝っている。長男は3年前にUターンし、次男は千葉県のアパレル会社に勤めていたが、1週間前に戻ってきて手伝い始めた。あいにく奥さんは用事があるため鹿児島市内にある家に出かけていたため留守だったが、私が口之島を去る日に鹿児島から戻って来たところをフェリー乗り場でお会いした。

滞在中の食事は息子2人と中村さんが代わる代わる作っていたが、刺身づくりは専ら中村さんの役割だった。水産物のほとんどは漁業を兼業する中村さんが獲ってきたものだ。時化の時もあるから、蓄養や冷凍にしてストックしている。

民宿には部屋が7つあり、大きさは異なるようだ。1人の私が案内されたのは最も小さな部屋だが、詰めれば3～4人ほど寝られそうだ。後述するようにダイビング客が泊まる関係から風呂は大きい。食堂の他に事務室、洗面所と洗濯場、マンガ本の本棚があり、トイレはウォシュレット付だから快適だ。ただ部屋には机がないので、パソコンの作業時は食堂のテーブルを借用した。屋外には海側にテーブルと椅子が置かれ、裏にはウエットスーツ等の干場も用意されている。

中村さんは民宿を整備した時の記録を残しており、その時の写真を見せてもらった。漁港脇の原野だったところに土を入れて土地を造成した。地鎮祭の時には、口之島の伝統ある「口之島狂言盆踊り」の弓を使った踊りを施主である中村さんが演じている。

車は軽自動車は何台もあり、借りることができる。昼食を食べ終わってから早速、車を借りて島を一周することにした。ところがこの車のフロントガラスにひびが入っており、走って

いるうちにひびが少しずつ拡大する気配をみせたので冷や冷やしながらの運転となった。



「民宿なかむら」の建物（左）、海を見渡す屋外に置かれた同民宿のテーブルと椅子（右）

### トカラ列島の入口

トカラ列島は鹿児島県本土から南南西に延びる南西諸島に位置しており、屋久島と奄美大島の間に連なる島々を指す。北から口之島、臥蛇島、小臥蛇島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小島、小宝島、宝島、上ノ根島、横当島の順に並んでいる。このうち臥蛇島、小臥蛇島、小島、上ノ根島、横当島の5島は無人島である。なお臥蛇島は長いこと人が住んでいたが、1970（昭和45）年に全島民が移転し無人島になった。

このトカラ列島は十島村に属している。7つの有人島は広範囲にわたることから各島の利便性を考慮して、役場は鹿児島市内（鹿児島港の近く）に置かれている。当初は中之島に置かれていたが各島にとって便利な本土に移ったのであった。同じように3つの有人離島からなる三島村も十島村役場の近くに役場がある。ちなみに多くの離島からなる沖縄県の竹富町役場も石垣市に置かれている。

口之島は鹿児島港からトカラ列島を巡る時の最初の島で、いわば玄関口にあたる。鹿児島港からは約200 km離れており、夜の11時に鹿児島港を出発した「フェリーとしま2」は翌日の早朝の4時に口之島に着く。鹿児島港からの船便は週2便である。

口之島は面積13.33 km<sup>2</sup>、周囲13.3 kmの南北に細長い島である。トカラ列島の中では中之島、諏訪之瀬島に次いで大きい。島のほぼ中央部に前岳（628m）がそびえる。集落は島の北部にあり、西之浜漁港近くの浜集落と、ひと山越した傾斜地に形成された本集落に大別される。

2020年国勢調査時の人口は103人であった。世帯数は62戸だから、単身世帯が比較的多いことになる。日本に復帰してまもない1955（昭和30）年の人口は548人であったから、この間に5分の1以下に減少した。そして高齢化率は47%（65歳以上が48人）に達している。

十島村では人口の減少をくいどめめるべく、様々な助成策を講じてUIターン者を受け入れ、あるいは山海留学制度の導入によって小中学校の維持を図ってきた。その結果、人口減は続いているもののその速度は緩やかになっている。ただ、口之島の場合は諏訪之瀬島や宝島などに比べるとIターン者は少ない。

## 東海岸北部

昼食後、民宿を出発。漁港を観察してから、東海岸北部の海岸線を走り、島の北端のセレイ岬に向かう。あいにく雨がぱらついてきた。

西之浜漁港は避難港に位置付けられていて、トカラ列島の港の中では最も大きい。フェリーが停泊する泊地、その隣に漁港整備された時に最初につくられたと思われる漁船の船溜まり、その北側の細長い泊地の3区域に分けられる。北側の細長い泊地は緊急避難用だろう。漁船の船溜まりには4隻の漁船が係留されていた。「民宿なかむら」の漁船は「海春丸」といい、ダイビング案内を兼ねているから一番大きくて新しい。トローリング用の竿2本も装備されている。もう2隻もトローリングをするようで竿が立っていた。奥まったところにある緊急避難区域にももう1隻漁船が係留されており、合計5隻の漁船を確認できた。

漁港と道路を挟んだ反対側に九州電力の内燃力発電所(ディーゼル発電)が置かれていた。燃料の重油は漁港からパイプラインで供給しているようだ。

道路の左手は海、右手はリュウキュウチク(笹の仲間)で覆われた山が続く。山側は牛の放牧場になっており、牛の餌はリュウキュウチクだ。道路との境には有刺鉄線が張られ、雨の中をところどころで牛がうずくまっていた。

しばらく走るとサンゴ礁の海底を30m四方ほど掘削したプールが現れた。平瀬海水浴場という。陸側には階段護岸が整備され、プールへのアクセスはいい。この近くに「七島藺しちとういの自生地」と書かれた看板が立っていた。畳表に使うイグサの一種である。本州のイグサは断面が丸く細いのに対し、七島藺は断面が三角形で非常に太いのが特徴で、トカラ列島に分布する。このイグサは笹やサワラの燻製を作る時の吊り紐、あるいは草履として使われていたらしい。



漁船の船溜まりと斜路(左)、セレイ岬に向かう海岸道路(右)

## 北緯30度線

しばらく雨の中を走ると、道路上に煉瓦が敷かれた線を通り過ぎた。その脇に北緯30度線のモニュメントが置かれている。この煉瓦の線が北緯30度を示している。

1946(昭和21)年2月、連合軍司令部は突如として「2.2分離宣言」により北緯30度線以南を米軍の軍政下に置いた。この線から北が日本で、南が米軍の軍政下になった。つまり口之島は2つの政府に引き裂かれたのである。口之島北端のほんの一部だけが日本に残り、ここから以南は日本ではなくなった。

旧十島村<sup>じゅうとうそん</sup>のうちの北部3島（現三島村を構成する笹島、硫黄島、黒島）を日本に残し、南部7島（現十島村）は1952（昭和27）年2月4日まで6年間にわたって、日本でなくなったのであった。

このため口之島は国境の島となり、口之島は奄美方面と鹿児島方面から「闇船」がやってきて、物資交換や売買をする密貿易の拠点となったのである。漁港付近の海岸沿いには新しく集落が形成され、にぎわうことになる。合法的な貿易にはLCというアメリカの許可が必要だったからそんな面倒なことは嫌だったのであろう。この時の情景を政好則は次のように記している。

「ただの砂浜の海岸に掘立小屋が次々と建てられ新しく集落ができた。ここを拠点に、ひともうけをたくらんだ商人達は次々口之島にやってきた。竹や笹で造った掘立小屋は、ランプ、ドラム缶の風呂、燃料は漂着した難破船の木片、水は笹を真ん中から割った樋で谷間の水を自分の家まで引いて、一応毎日の生活はできていた。海岸から地元の集落に登る坂の途中に、郵便局がポツンとたっており燃料のドラム缶が二、三本いつも転がっていた」

その後、トカラ列島は奄美群島よりも1年早く日本に復帰し、2月10日に十島村として発足、今日に至る。十島村は70年の節目にあたる令和4年3月に「十島村日本復帰及び村制施行70周年記念誌」を発行している。

北緯30度線を過ぎてすぐに道路は行き止まりになった。この北の先端がセリイ岬で、背後の山がフリー岳である。

岬の先端に赤茶けた大きな岩が横たわり、印象的である。「赤瀬」と呼ばれている。この岩には磯伝いに渡ることができるそうで、周辺は大物釣りのポイントとして有名ならしい。行き止まりの広場でUターンして西之浜漁港に戻る。



北緯30度線モニュメント（煉瓦敷が北緯30度線で手前が日本だった）（左）、口之島北端の赤瀬（右）

## 放牧場

続いて島を一周することにする。南北に細長い楕円形のような島の北側に取り付けたようにフリー岳を抱える半島が伸びているが、この半島を除く南側には島を周回する林道が整備されている。そして島の南東のはずれにセラマ温泉がある。島を一周するにあたって是非この温泉に入浴したいと思った。セラマ温泉に入るには鍵が必要である。つまり無人の温泉なのだ。民宿で温泉の鍵が本集落のコミュニティセンター（以下コミセン）に置いてあるので、ここで受け取るように言われたから、先ずはコミセンをめざした。

ところが道を間違えて旧道を通ったものだから（後でわかったのだが）、本集落の一番上

から集落内の屈曲した狭い道を行くことになった。不案内の土地を走り、何とかコミセンに着いた。センターの前には地元で「カワ」呼ぶ水場があった。昔は貴重な島民の水場だったので、現在は湧水を水源とする水道が敷かれているので、洗い物以外にはあまり使われていない。大きなガジュマルの木が「カワ」に影を映していた。

あいにく日曜日だったのでコミセンには誰もいなかった。中村さんから人がいなかったら、壁に掛けてある鍵を借りていくようにと言われていたのでこれを受け取る。一周道路を反時計回りに走り、まずは南端付近のセランマ温泉をめざす。

本集落からしばらくの間は牧草地や放牧地が続く。島の西側斜面は放牧場や餌を刈り取る牧草地が広がっている。

トカラ列島の牛の餌はもっぱらリュウキュウチクであったが、放牧は牛の転落などのリスクを伴う。特に子牛の繁殖にとってはより安全な牛舎で飼養することが望ましい。牛舎で飼養するためには干し草が必要でリュウキュウチクを餌にすることは実質的に難しい。このため、近年ではリュウキュウチクに覆われた土地を開墾し牧草地に転換することが進められており、子牛の出荷数が最も多い口之島で先行してこの牧草地への転換が進んでいるようなのだ。このため造成工事中の場所も見られた。

一周道路の周囲はやがて竹林からスダジイやタブノキなどで構成される照葉樹林に変わった。そうしたと思うと再び竹林が現れ、さらに森林へというように道路沿いの植生はくるくる変わる。

そのうち道路はゲートで遮られた。ここからは野生牛の生息エリアに入る。ゲートを開けて中に入り、再びゲートを閉める。野生牛の生息エリアは森林に変わった。このように口之島はおおむね北部が竹林で、南部が森林というように植生は全く異なっている。ちなみに竹林は焼畑の名残といわれている。



コミセン前の「カワ」と呼ばれる水場（左）島の南側に広がる牧草地（右）

## セランマ温泉

一周道路のほぼ南端、今でも水蒸気を吹き上げる燃岳（425m）の麓にあたりから海に下る道がある。くねくねした照葉樹林の中を下った先がセランマ（瀬良馬）温泉である。山の中にポツンと温泉施設が整備されている。

駐車場の脇に「セランマ交流館」と呼ばれる建物があった。ここは2014（平成26）年にリニューアルしたようだ。中には内湯があるようだが、その存在に気づかず、この建物には

入らなかった。

沢を隔てた隣に露天風呂がある。コミセンで借りてきたカギで入口を開けて中に入る。ところがカギは6種類ほどあり、どれが該当するのか試行錯誤したから結構時間がかかった。更衣室で服を脱ぎ、露天風呂に入った。露天風呂といってもコンクリートの浴槽が整備され、野趣あふれるものとは言い難い。

泉質は無色、無臭で、硫酸塩泉のようだ。蛇口には炭酸カルシウムが析出していた。宿では、最初に温泉の蛇口を開けて湯を貯めなければならないといわれていたが、湯の蛇口が壊れていて温泉水は注入されっぱなしになっていたから、すでに浴槽は満水であり、すぐに入ることができた。

入浴客は誰もいなかった。1人で静寂な山の中の温泉に入っていると、不思議な気分になる。まさに秘湯という言葉がふさわしい。温泉には10分ほど浸かった。

集落から車で20分ほどかかること、コミセン内に火・木・土曜日限定の「さとの湯温泉」があることから、地元島民の利用頻度はあまり高くないと思われる。一方観光客にとってはこの秘湯は魅力的なので、もっぱら島外客の利用が多いのだろう。

温泉施設から海岸に降りる道があり、海岸付近には周辺の島々を眺望できる展望所があるようだが、高低差が激しいことと時間も限られていたので行くのをやめて、林道口之島線に戻った。林道から燃岳が見える場所があり、山の東側から水蒸気を吹き上げていた。



山の中にぽつんとあるセラマ温泉（左）、セラマ温泉の浴槽（右）

## 野生牛

口之島の南東側の半分には野生の牛が生息している。牛が北西側に移動しないように道路にはゲートが設けられていることはすでに述べたが、この一帯はスタジイやタブノキなどの原生林で、野生牛の生息範囲は島の南東部の約720haに及び、島の面積の半分以上を占めている。

野生牛が時々道路に現れた。西側のゲートから東側のゲートを抜けるまでの間に5～6頭の野生牛に遭遇した。脅さなければ恐れることはないと言われていたので、車のスピードを極端に抑え、ゆっくりと牛の脇を通過した。昔、フィジーの日本大使が車を走らせていた時、路上で牛に激突して死亡した事件があったことを思い出し、慎重な運転を心がけた。野生の牛を見るのは初めてであったから貴重な体験になった。

口之島の野生牛を最初に報告したのは林田・野澤（1964）である。島民からの聞き取り調

査をもとに、この牛のルーツは 1918（大正 7）年ごろに諏訪之瀬島から導入した数頭の牛としており、急峻な地形のため、放牧地での管理が行き届かず、島の南部に逃げ込んだものが、野生化したとされている。この野生牛は、黒毛、褐毛、白斑という毛色変異を示すとともに、小柄で後駆がしまり、腰骨幅と座骨幅が著しく狭い、という体格を有している。

明治時代に書かれた笹森儀助の「拾島状況録」には「牛七頭ヲ有シタルモ、之ヲ制禦スルノ方法ヲ知ラズ、故ニ之ヲ農事ニ使用セズ亦肥料ヲ取メズ、徒ラニ野ニ放飼ス…」と書かれており、こうした管理状況が野生牛を生んだのかもしれない。

日本では山口県見島の「見島牛」とこの口之島の野生牛が西洋種の影響を受けていない日本の固有種といわれている。なお、長崎県五島市にある葛島（無人島）にも無人島化に伴って取り残され野生化した牛がいるらしい。

野生牛の生息数は何人かの研究者が調査しているが、一番新しい報告は、（一財）家畜学研究所の印牧美佐生さんが 2014 年に調査したもので、口之島に生息する「野生化牛」（印牧さんは化をつけている）の全頭数を約 50～70 頭と推定している。

この野生牛は島民の共有財産であった。かつては島民による「牛狩り」が行われており、馴致して農耕や山での作業に使役されるとともに、年に数頭の雄牛が島外に肉用あるいは闘牛用として販売されていた。その収益は祭事などの共通経費を賄い、学校建設の資金の一部として活用された。

闘牛用は闘牛が盛んな徳之島に売られた。後に島民に聞いた話では、野生牛はめっぽう強く、優勝したことが何度もあったそうだ。強い牛を求める徳之島からのニーズが高かったようである。

ところで島には 100 頭を超える和牛が飼育されているので、これらの飼育牛と野生牛との交雑が心配されるが、上述の印牧によると、①ゲートと地形の障害による物理的隔離、②緩衝地区として畑があること、③飼育牛との間に有刺鉄線や鉄パイプによる牧柵、④和牛の繁殖は全て凍結精子によるもので、繁殖学的隔離、⑤人による管理、によって交雑の恐れはないと断言している。

16 時 03 分に第二ゲート（東ゲート）を通過して、野生牛の生息域から離れた。



野生牛の生息域に設けられたゲート（左）、道路上で遭遇した野生牛（右）

## 農業

島を一周して集落に近づくと畑が目立ち始めた。途中で農作業をしている人がいたので



話を聞いた。

島から出荷される農産物は柑橘類（セトカ）と田芋（水芋）がメインで、パッションフルーツやバナナ、つくね芋などもつくられている。自家消費には様々な野菜類が作られているが、最近ではモリンガというインド原産の木が人気で、葉を青汁にして飲んだりしているという。

笹森の「拾島状況録」によると、口之島には水田が1町3反あり、13石ほどの米が採れたらしい。1石は成人1人が1年間に食べる量とされていたので、島で米を自給するのはもとより困難であった。したがってサツマイモと麦を主食にしていたようだ。

集落の下の前之浜海岸付近に低地があり、今はここに田芋が植わっているので、水の確保も容易な場所である。地形から推定するとこの場所が島の水田だったのだろう。

集落の入口あたりに農水産物加工施設があった。この建物の半分は口之島売店という島で唯一の小売店で、建物の前にはコカ・コーラの自動販売機が置かれている。加工施設はあまり使われている様子うかがえない。

口之島は他のトカラ列島の島々と同様、貨幣経済化が進む以前は半農半漁の自給的生活を送っていたが、現在、農業は後述する肉牛の繁殖が中心で、漁業の他は、発電所勤務、郵便局勤務、地元建設会社があるので建設業、そして民宿などの宿泊業が主な収入源になっている。

島を一周して17時少し前に「民宿なかむら」に戻り、宿のご主人である中村さんに漁業と彼のこれまでの歩み取材した。



田芋の畑（左）、島で唯一の店舗と農水産加工施設（右）

## 深海釣と曳釣り

十島村漁業協同組合に所属する口之島の組合員は正が4人、准が13人である。正組合員の4人は漁業を商売とする漁師で、深海釣りや曳釣りを営んでいる。

メインは深海釣りで、島から10数km沖合の水深300～500mの海域が漁場だ。主な漁獲物はアオダイやハマダイである。餌は冷凍サンマを使う。ただ近年はサメが増え、釣りあげる途中でサメに食べられる被害が多いという。以前は台湾船がサメを獲りにきていたのだが、最近では獲りに来なくなったことがサメ資源増加の要因だと、漁師は考えている。潮の流れが早い時期は深海釣りには適さなくなるので、この時期は曳釣りに切り替わる。

曳釣りは島から5kmほどの沖合が漁場となる。疑似餌に潜行板をつけて曳航する。主な漁

獲物はシビ（キハダマグロ）とカツオ類がメインだ。曳釣りは春先と秋が中心である。深海釣りおよび曳釣りともに日帰り操業である。

准組合員は主として潜ってイセエビを獲る。イセエビは通常刺網で獲るが、サンゴ礁が発達しているトカラ列島では網がサンゴに掛かって傷むため、獲るための独特の道具（ハサミ）が工夫されている。ちなみにイセエビの解禁期間は8月21日から4月1日である。

これらの漁業の他に、島の男たち全員が参加するダツ（地元でナガサイと呼ぶ）の集団操業が行われていた。この漁業については後述する。

中村さんは漁獲物を基本的に民宿で消費するが、多く獲れた時はフェリーに乗せて鹿児島島の魚市場に出荷している。

### Uターンした中村さん

中村勝幸さんは4男1女の4男として口之島に生まれた。長兄は優秀な漁師だったがすでに亡くなり、次兄は自衛隊に勤務していたが白血病で早世している。実家はコミセンから3軒上にあっただが、火災で焼失し、現在は更地になっているとのことだ。

島には高校がないため、中学を卒業すると全員が島を出る。中村さんは1978（昭和53）年4月に枕崎市にある県立鹿児島水産高校に進学した。入学式には父親も来たそうだ。

水産高校を卒業後、魚類養殖の会社に勤め、錦江湾でブリ養殖の仕事に従事する。この会社は養鰻、魚箱や生簀の販売も兼業していたそうだ。職場ではスキューバで生簀に潜りブリを観察する仕事もしていた。この時の経験がダイビング事業を始めるにあたって役だったようだ。同社を退社後1年間は指宿の会社で働き、2010（平成22）年にUターンし、漁業に従事する。同時に2014（平成26）年に10年以上にわたってトカラ列島に通い詰っていた福岡県小倉市のダイビングショップ代表の高木祥行さんと組んでダイビングサービスを始めた。

当初、ダイビング客は本村の集落にある民宿を利用していたが、増加するダイビング客に対応するためには新たな宿泊施設が必要となる。中村さんは借金をして民宿を現在地に建設し、2016（平成28）年5月にオープンした。



Uターンして12年になる中村さん（左）、中村さんの漁船「海春丸」

以来、漁業と民宿、ダイビングサービス、遊漁案内、海上タクシーを兼業している。つまり島に囲まれている立地条件を活かし、海で可能な事業を全て営んでいるわけだ。十島村は島の人口を維持するためにUIターンを支援する様々な助成策を講じているが、中村さん

は模範的事例になっていて、村のパフレットに紹介されているのを以前見たことがある。漁港には中村さんの漁船・海春丸（9.1 トン）が係留されている。昨年、新造したもので、口之島では一番大きな漁船だ。

令和4年10月17日

## フリイ岳

カメラを忘れてきたのに気づき、宿に戻って7時27分に再出発した。朝方は晴れ間が見られたが、午後にかけて天気が悪くなることが予想されたので、見晴らしのきく午前中に島の北端に位置するフリイ岳に登ることにした。

フリイ岳は標高235mで、「しま山百選」に選ばれている。東海岸のモーイ崎から登山口までは車で行ける。そこから頂上までは徒歩になる。距離にして480mほどだ。登山道は整備が行き届いているので登りやすい。道の両側は笹が繁り、牛の放牧地となっている。

道路上に牛の糞が転がっており、そこにキノコが生えていた。柵があって牛は登山道には入れないはずなのに糞があるということは、どこか柵が壊れていてそこから侵入したものと考えられる。

登山道の背後に島の最高峰の前岳（628.3m）を望むことができるが、ガスがかかって頂上が見えない。フリイ岳に登り詰めたところでようやくガスが切れ、前岳の写真を撮ることができた。上に登るほど笹やススキが両側から迫り、夜間に降った雨で濡れていたため、シャツやズボンはびしょ濡れになってしまった。

頂上付近に防空壕跡、その先に大戦当時の兵舎の跡とされる平地があった。洋上を通行する船舶を監視するために20人ほどがここに詰めていたらしい。水タンクの跡もあった。雨水を貯めたのか、下から運び上げたのかはわからない。

ここを通過して間もなくフリイ岳の頂上に出た。頂上は平らで、狭い広場がある。三角点が置かれ、木製の展望台が整備されている。7時56分、頂上に立った。フリイ岳は一面リュウキュウチクで覆われ、大きな樹木は全くないので、眺望は素晴らしい。南の方角には中之島が見えた。北の方角に屋久島が見えるはずだが、あいにくの曇天で見ることができない。西之浜漁港の背後に段々畑の跡が確認できた。島では食料を自給するために険しい山の斜面を切り開き、農地を造成したのだが、今ではすっかりリュウキュウチクに覆われている。頂上にはわずか5分いて、8時01分に下山した。



フリイ岳山頂の展望台（左）、フリイ岳からの口之島南部の眺望（右）

口之島の最高峰は島の中央よりもやや南にある前岳（628.3m）である。これに次ぐのが西側に位置する横岳（501m）だ。前岳は途中の道路が崩落して危険なため通行が禁止されているので、2番目に高い横岳に登ることにした。

横岳の頂上まで道路が整備されていて、「口之島スカイロード」と呼ばれている。しかしあまり車は通らないと見えて、道路の真ん中にまで雑草が伸び、周囲からも笹やスキが延びている。ガードレールは壊れている箇所がいくつもあり、カーブミラーは台風や潮風の影響を受けてことごとく壊れていた。

道は次第にガスに覆われるようになり、ほとんど視界はゼロになった。冷や冷やしながら上り詰め、8時45分に横岳山頂に到着した。頂上にはネットが張られていたが、無視して中に入った。かなり大きな建物があったが、何に使われていたのかわからない。周囲はガスに包まれ、全く何も見えない。帰路にかかると、小雨が降り始めた。

## 口之島畜産組合

横岳から島の東側の集落方面に下る。しばらくすると畜産農家が現れた。

口之島の牛舎は白い屋根、白い壁面で、統一されている。農家でその理由を聞くと、白は光を反射するので、牛舎が暖まらないようにとの配慮からだという。また、屋根の材質はタキロン（商品名）製で、牛舎専用のものが使われているという。

牛舎の中を覗くと、女性3人と男性1人の4人がかりで、ちょうど牛の角をカットする作業の最中だった。牛に刺激を与えるから中に入らないようにと注意される。この経営体では30頭の親牛を飼っているというからトカラ列島の畜産家の中では大規模な方だ。牛舎には生後3ヶ月の子牛がいた。

この牛舎からさらに下り、集落の一番南のはずれにある牛舎を訪ねた。最初に出てきた女性に牛の話聞かせてほしいとお願いすると、近くに組合長がいるという。絶好のタイミングだった。ところがその組合長が若いのに驚いた。日高<sup>はじめ</sup>創さんといい、この女性の息子だった。つまり組合長のお母さんにあたる。

日高創さん（37歳）は島の畜産農家の3代目で、10年ほど前にUターンした。島の中学校を卒業すると、鹿児島市内の普通高校に進学、その後、鹿児島県の農業大学校で学んだ。

十島村の主産業は黒毛和牛の繁殖で、各島で子牛を生産、出荷している。その中で最も生産量が多いのが口之島である。2020（令和2）年の口之島の子牛出荷頭数は165頭だった。この年の十島村全体の出荷頭数は437頭、十島村全体の1/3強に相当する。またこの年の平均単価は62.8万円だったから、「1億円産業」になる。

日高さんのところは60頭の親牛を飼養し、そのうちの約8割が子を産むので年間の子牛出荷数は48頭ほどになるという。つまり日高さんは口之島全体の出荷数の約3割のシェアを有しているというわけだ。日高さんの家は、2011（平成23）年から2020（令和2）年までの直近10年間の売上げがトップの畜産農家である。

日高さんが組合長を務める口之島畜産組合の組合員は10経営体だ。ただ親子は別々に組合員になっているので、繁殖農家の経営体数は5経営体だという。何れも家族経営で、年々経営体数は減少しているが、1経営体当たりの飼養頭数は増えており、経営規模の拡大が進んでいるのだそうだ。

島の放牧場は共有地で、各経営体は牛舎から車輛ないしは徒歩で牛を運ぶ。その際、獣医師の診断に基づき妊娠検定をして、妊娠している牛と非妊娠の牛は放牧場を分けているのだという。出産が近い雌牛は牛舎に移して出産を迎える。

島では笹を飼料にするのが文化として定着しているので、現在のところ、放牧場では専ら笹が餌である。笹は繊維質が多い。餌はタンパク質が多いものがよいことから、子牛には特別の餌を与えている。菌体飼料も与えているようで、酪酸系と乳酸系ともう一つのタイプがあるのだそうだ。なお、創さんのところでは、2年ほど前から鹿児島から取り寄せた飼料米（HWS）を導入している。

放牧には牛の事故がつきものなので、牛舎で飼う方が有利だ。ところが牧草と異なり、笹を伐採して発酵・貯蔵することは困難なため、牛舎で飼うには牧草に変える必要がある。このため、上述したように草地改良事業で笹を伐採し、牧草を育成する準備に入っているわけで、今後、口之島では逐次牧草地が拡がり、ロールバールサイレージに切り換えていくことになるだろう。

1頭の親牛が生涯で産む子牛の数は12～13頭という。創さんのところで飼っている牛の最高齢は2004（平成16）年生まれなので、20歳になるのだそうだ。

ちなみに創さんは今年から地域おこし協力隊員（22歳）を受け入れ、畜産の研修にあたるようで、今日は村役場に行って、手続きをしてくと話していた。



口之島畜産組合の組合長・日高創さん（左）、「大自然を駆けるトカラ黒毛和牛」と書かれた牛舎（右）

## 中部東海岸

日高さんに話を聞いてから、東海岸を南下する。海側は牛の放牧場になっている。日高組合長の牛舎を過ぎると建物はなくなった。この道路は戸尻というところまで続いているが、途中でゲートがあってそれ以上は進めなかった。10時16分に折り返して北上する。

途中にヘリポートがあり、その先に十島村口之島野之頭墓地と書かれた共同墓地があった。2008（平成20）年10月に整備されたものである。後述するように集落内に墓地（テラ）は残っているが荒廃している。現在、島に住んでいる世帯は大体こちらに墓地を移している。墓石は20基あり、姓別では日高が7、肥後が5、中村2、池田2、山之上2、永田1、森崎1という内訳であった。もともと島の墓地は集落内にあったが、崖崩れが起こりそうで危険なこと、土葬から火葬に変わったことから骨壺を収納しやすいスタイルにかえる必要があったことなどが墓を移した理由とされている。

共同墓地の近くに島の運動場がある。しかしグラウンドは草が生い茂っていて牧草地と間違えそうだ。運動場内にはバックネットの柱や旗を掲揚するためのポールがあり、かつて使われていたことを思わせるが、人口が減少した今日、運動場はほとんど使われている気配はない。トイレはあるものの最近は全く使われていない模様だ。

集落内にある唯一の売店である口之島販売店で、芋焼酎（焼酎を買い込んだのは時化で欠航が予想されるため）、クッキー、缶コーヒーを購入する。2020（令和2）年にリニューアルされているので、きれいな店だ。

続いて集落から坂を下って前之浜にでる。海岸は玉石が敷き詰められている。吹き溜まりに漂着物多い。

近くに八幡神社があり、木製の粗末な鳥居が2基建つ。近くに大きな榎の木がそびえていた。海岸沿いには小規模な牧草団地があった。



改葬され新しく海岸付近に整備された墓地（左）、中部東海岸の前之浜（右）

## ダツ漁

昼近くになったので、民宿に戻り昼食を食べる。昼食は豚丼、みそ汁、コロッケ、ハムカツであった。如何にも若い息子が好みそうなメニューである。

午後から口之島の集落を見に行く予定を立てていた。昼食後、西之浜漁港背後の急坂を登る途中で、車が止まってしまった。何とか動き出したが、朝から警告灯がついていたのが原因と思われ、途中で再び動かなくなると大変なので、民宿に引き返す。

この日の23時に鹿児島港を出発する船は欠航が決まった。したがって口之島にもう1泊することになった。依然として雨は降り続けている。午後からの本集落の散策と取材は天候が回復する明日に回すことにした。午後からは民宿の食堂でパソコンに向かい、これまでの取材メモを作成する。また民宿に置かれている口之島関連の図書に目を通す。民宿には顧客は誰もおらず、私1人であった。

この日の18時から口之島のダツ漁の古い映像がNHKのBSプレミアムで放送されることになっていた。事前に通知されていたから、おそらく島中の人が見ていたことだろう。1985（昭和60）年の作品で、タイトルは「巨大魚の飛ぶ海」である。

中村さんと一緒に食堂で観た。この番組は「ぐるっと海道3キロ」というシリーズものの一部で主として漁業のことを扱っており、私も以前いくつかの地域を見たことがある。またナレーターの国井雅比古さんの語り口は定評があった。

口之島では冬にダツを追込み漁法で獲り（夏のダツは寄生虫がいるので、ダツを食べるのは脂がのった冬季に限定された）、全家庭に配ることが毎年行われていた。ダツが島に回遊して来る場所は決まっており、3隻の漁船が走り回って、石を投げながらダツを脅して追い込み、網に刺さったダツを漁獲するものだ。番組はこのダツ漁を中心に島の漁業の様子を特集したもので、長期滞在して取材したNHKならではの質の高い番組であった。ちなみにこの追い込み漁は昔、沖縄県の糸満から伝わったものだろう。ダツ漁には大勢の労力が必要だ。このため人手が少なくなっているから行われていない。ちなみに以前はダツを獲るだけの組合も組織されていたという。

1985年当時、集落の周辺には段々畑がたくさん残っていた。また屋根の色はカラフルだったから、今日のように白一色のルーフィングはその後導入されたようだ。テレビでは屋根にコールタールを塗る作業をしているところも登場した。また口之島の姓は日高、中村、肥後が多いことから、漁協の総代の選挙は姓でなく、名前で投票することも紹介されており、37年前の口之島の様子を知ることができた。

この番組で、イルカを突いていたのは中村さんの兄の勝也さん、コブジメやタコを潜水で獲っていたもの中村さんの兄で、今は亡き兄の映像を見て、中村さんは感慨ひとしおだったに違いない。

**令和4年10月18日**

**口之島小中学校**

この日の午前中は徒歩で本集落を回ることにした。口之島の本集落は西之浜漁港からひと山越した東側の斜面に階段状に形成されている。コミセンの下の駐車場に車を停めて、最初に集落の最上段にある小中学校に向かう。

急な坂を登る途中に、山海留學生が滞在している「口之島寮」があった。普通の一軒家のような建物で、意外と小さい。ここには留學生7人が共同生活を送っている。鹿児島県内からの留學生が4人、神奈川県（茅ヶ崎市）、愛知県、島根県から各1人という内訳である。

口之島寮の上に比較的新しい村営住宅が建つ。2軒長屋が2棟なので4戸分に相当する。さらにその上に「くろしおの宿」という民宿あり、その先に十島村立小中学校が置かれている。

グラウンドに女の先生がいたので話しかけると、偶然、校長先生が近くの校長宿舎から現れた。早速、島の小中学校の現状について話を聞く。校長は赴任して2年目とのことだ。

現在の在校生は小学生が6名、中学生が4名の合計10名である。小学生は1年生と4年生がいない。上述したように山海留學生は7人だから、地元出身の児童・生徒数はわずか3人ということになる。小学生は全員が山海留學生である。中学生の4人は郵便局に勤める人の子供、島の出身者2人と留學生1人という内訳になる。

教職員はALT（フィリピン人）を含めて10人である。小学校は複式授業で、2クラス（2、3年生と5、6年生）分だ。先生は集落内に分散する教員住宅に住む。校長先生は夫婦で赴任しているが、他の先生は、妻帯者2人、残りの7人は単身である。

こちらの学校では地域のつながりを重視しており、筍採りや追い込み漁などを学校行事に取り入れている。運動会が終わると修学旅行、さらに11月5日に文化祭があり、この時

期は行事が目白押しになるという。

校舎の裏の道を抜けると、集落の上を通る旧道に出た。初日に間違えた道だ。旧道の脇に島で「テラ」と呼ぶ墓地があった。ほとんどの墓石が倒されており、こちらの墓地は放棄されていた。現在島に住む人の墓地は前日見た共同墓地に改葬されたのだろう。

「テラ」から少し登ると、塩見峠になる。峠を下ると西之浜漁港に出る。峠の近くに木製の簡素な鳥居があり、その奥に小さな社が置かれていた。



山海留学生口之島寮（左）、村立口之島小中学校（中央が中学校、右が小学校）（右）

## 白い屋根の集落

峠から再びもと来た道を下り、集落に向かう。

途中で餌木の原木である魚木（フウチョウソウ科の常緑高木）という樹木の大きな木があった。高さ約 20m、幹回りが 4 m を超す国内最大級のものとされている。

その先に松元荘という宿泊施設、さらに十島村立口之島へき地診療所、その対面に郵便局があった。診療所からお婆さんで出てきた。診療所は 9～17 時までで、土日祭日が休診である。診療所に医師は常駐しておらず、看護師 1 人が詰めている。患者がいなくなったと見えて女性の看護師が外に出てきた。島の医療の現状について少し話を聞いた。

この人は診療所に 26 年勤めているベテランである。医師は日赤鹿児島病院から月に 2 回やって来る。眼科、皮膚科、耳鼻咽喉科の専門医による診断は年に 1 回、歯科は年に 2 回である。新学期が始まる 4～5 月に学校医が診断。また伊集院にある「こども病院」から小児科医が年 5 回ボランティアで診療にやってくる。医薬品は月に 1 回の頻度でフェリーが運んでくる。薬は諏訪之瀬島で管理している。5 月にはレントゲン診断があるそうだ。

日常の診断は症状等をネット上でやりとりする「オンライン診療」が行われている。医師の指示にしたがって看護師が患者を手当し、あるいは投薬する。なお、65 歳以上、中学生未満は医療費が無料だという。

診療所の坂を下ると、口之島交流施設「あっぱう家」という新しい宿泊施設があった。1泊 4,000 円の自炊施設で、「ワーケーション」利用に限定した施設である。

続いてコミセンの背後に連なる集落を見学する。口之島の住宅はもともと茅葺であったが、NHK によるテレビ撮影が行われた 1985 年当時の屋根はカラフルで、今のような白い屋根は見られないので、この 30 年ほどの間に切り換ったものと思われる。

地元の人の話では、台風時に横なぐりの雨が降ると、雨水が屋根の隙間から入り雨漏りが



することから屋根の全面を覆うアスファルトルーフィング（通常は屋根の下地材として使用）にきりかわったのだそうだ。当初、アスファルトが塗ってあるので黒色だった。ただ黒だと熱を反射しないため部屋が暑くなることから反射する白のペンキを塗るようになったとのことだ。この方式が島のほぼ全戸に拡がり、口之島の住宅の屋根は白くなった。ちなみにトカラ列島の多くの島は台風が多いことから、ルーフィングが導入されているが、白一色は口之島だけだ。

集落の一面で「口之島小中学校へき地寄宿舎整備工事」と書かれた現場があった。森山（清）組が請け負っていた。ここが新しい山海留学生の宿舎になるのかもしれない。



村立口之島へき地診療所（左）、白い屋根の集落（右）

### 肥後清己さん

タモトユリの原種を栽培しているという肥後清己さんのご自宅を訪ねた。ちょうど納屋で刺網の修理をしているところだった。

すでに85歳になられたそうだが至って元気である。6年前まで吉留建設という島の会社で働きながら牛を飼っていたそうだ。多い時には10数頭を飼養していた。牛飼いの合間に海に出て、イノー内で漁をしていたという。定年になった後も同建設の人が頭を下げて継続雇用をお願いにやってこられた時はうれしかったという。しばらく建設会社で働いていたようだ。今は牛飼いやめ、たまに海に出て漁をし、野菜類を作る自給自足の年金生活者になっている。

5年前に突然奥さんを脳溢血で亡くし、現在は単身である。身内では妹の息子夫婦がUターンしているらしいが、寂しさは隠し切れない。

肥後さんははるばる訪れた遠方の客を歓迎してくれた。ちょうど納屋にタモトユリの種子が保管されており、見せてもらう。続いて家のなかに案内され、お菓子とミルクティーのペットボトルを御馳走になる。

肥後さんのところにタモトユリを研究している鹿児島大学の先生が訪ねてきたことがあるそうだ。その先生は、戦後口之島から持ち出され、北海道の園芸家が栽培しているタモトユリと称するユリは口之島のタモトユリの原種とは異なる、と指摘していたという。また、島の西部中央付近にあるタモトユリの群生地もユリも原種とは異なるそうだ。口之島のタモトユリはほぼ絶滅状態にあり、肥後さんが育てているタモトユリは極めて貴重な存在なのである。

室内には肥後さんが育てているタモトユリの写真が飾れていた。またイノーの漁業のついでに集めたシャコガイをはじめとする様々な貝のコレクションが玄関の靴箱の上に並べられていた。「気に入った貝をもっていけ」というので、2種類のタカラガイをいただいた。庭には何といったか忘れたが、珍しい蘭が植わり、木に寄生した蘭も見られた。肥後さんはどうも植物や動物が好きのようだ。帰りにたくさんの島バナナをいただいた。



網の修理をしていた肥後清己さん（左）、木に寄生する蘭の一種（右）

## タモトユリ

タモトユリは口之島固有の野生種で、この島にしか分布していない。したがって鹿児島県の天然記念物に指定されている。草丈は60～70 cmで6月下旬から7月にかけて白い花をつける。ユリの花は横向きに咲くのが普通だが、このタモトユリはまっすぐに上を向いて花を咲かせ、その香りは気高いという。もともと野生のヤギなどに食べられた結果、ヤギが立ち入ることができない断崖に残存、分布していた。しかし上述した戦後の密航時代に、欧米の園芸家の人気があったこのユリは高く売れたことから乱獲され、激減したという。

このタモトユリが清己さんの住宅に向かう土手で栽培されている。あいにく花の時期は終わっていたので現物の花を見ることができなかった。

この土手に植えられているタモトユリは、彼岸前に雨後のタケノコのように一斉に芽を吹き、7月1日前後に花を咲かせるという。清己さんは秋に種子を取って実生からもタモトユリを増やしている。写真の赤い杭は実生から増やした球根の位置を示している。また、右側の写真はタモトユリの種子である。



土手に植えられているタモトユリ（左）、タモトユリの種子（右）

## 横岳

清己さん宅でタモトユリの取材を終えてから宿に戻り、昼食を食べる。

午後から車で横岳（501m）に向かった。前日、横岳の山頂まで行ったのだが、ガスがかかり何も見えなかったからだ。この日は快晴で眺望が優れ、前岳、下界の放牧場などが一望でき、さらには隣の中之島をまじかに見ることができた。

頂上付近の駐車場に車を停めた。前日はガスで何も見えなかったので気が付かなかったが、駐車場の下は断崖絶壁で下を覗くと足がすくむ。ガードレールはなく車止めのコンクリートが置かれているだけなので、間違えてアクセルをバックで吹かせたら転落しかねない。一巻の終わりである。頂上には無線中継局が置かれていた。

集落を抜けて西之浜漁港に向かう。集落の手前には自家用の菜園があり、また柑橘類を栽培する農園もあった。果実には袋がかぶせてあったので種類はわからないが、上述したセトカかもしれない。



横岳山頂の無線中継局（左）、横岳から前岳を望む（右）

## ダイビングとその他のサービス事業

漁港に戻り、中村さんのダイビング客用の待合室に伺った。待合室の中では理髪師の免許を持つ人が中村さんを散髪しているところだった。島には床屋がないから、こうして知り合いから髪を刈ってもらうようなのだ。この床屋さんはもう一人の若い人の髪も刈っていた。

待合室には冷蔵庫、流し台、食器棚、オーブントースター、テーブルと椅子が整っている。壁にはこれまでに口之島で潜った人の写真が多数飾られていた。口之島で潜ったダイバーの写真を必ず撮って飾っているのだろう。

ダイビング客の受け入れには現地にボンベを用意しておくことが不可欠である。車にボンベを積み込み、フェリーで来るのは一苦労だし、コンプレッサー持参という訳にはいかないので、現地にボンベとコンプレッサーがあれば、連泊してダイビングを楽しむことができるからだ。

中村さんのところでは10リットルのボンベ31本、12リットルのボンベ6本を備え、当然ながらコンプレッサーもある。トカラ列島の島で口之島以外にボンベを持っている島は他にない。

南の島とはいえ冬の寒さは堪えるし、船が欠航、あるいは時化になるケースも多いのでダイビングのシーズンは4～11月が中心である。ダイビング客にとっての口之島の魅力はサ

ンゴに加え、ギンガメアジ、イソマグロ、ロウニンアジ、サメ、マンタなどの大型回遊魚類が見られることにあるようだ。島の周囲にはダイバーのレベルに応じて12ヶ所のダイビングスポットがある。何れも中級者以上だ。

中村さんが受け入れているダイビング客は年間300人ほどだが、コロナ禍にあってしばらく受け入れを中止していた。2022年の5月から受け入れを再開している。ダイビング客は提携先の小倉のダイビングショップがインストラクターと共にツアー客を送り込んでくる。100本以上を経験した中級者以上の人が多いという。中村さんのところでは、不特定多数のショップを対象とせず、信用のおける小倉のショップを中心に受け入れているようだ。

中村さんはダイビングサービス以外にも、磯渡しやチャーターなどの遊漁案内業も行う。船に弱い人が磯渡しを選ぶという。主な釣りの対象はロウニンアジやカンパチだ。また海上タクシーも兼業しており、トカラ列島の島間以外にも種子島、屋久島、口永良部島などに遠征することもある。利用者は仕事関係や郵便局、観光客など多岐にわたる。

つまり中村さんは漁業の他に、ダイビングサービス、遊漁案内、海上タクシーを複合的に営んでいるわけだ。島の海洋資源は何も水産資源だけではない。経済のサービス産業化に進んだ今日、多様な海洋資源を活用する中村さんの取り組みは、これからの島の生きる道を示しているのではないだろうか。



漁港脇のダイビング用の小屋とスーツ干場（左）、コンプレッサーとポンプ（右）

令和4年10月19日

フェリーが欠航したため、口之島の滞在は1日延びた。修学旅行の中学生の日程も1日延びたことだろう。4時45分に宿を出て西之浜漁港に向かう。あたりはもちろん真っ暗闇だ。フェリーが着くと、「民宿なかむら」の奥さんが降りてきたので軽く会釈する。

口之島を5時10分に出発して、次の訪問地である平島に向かった。

#### 【文献】

芝慶輔編著（2011）：密航・命がけの進学、アメリカ軍政下の奄美から北緯30度の波濤を越えて。政好則「わが青春彷徨」p.172 五月書房、東京

南日本新聞社編（1981）：トカラ 海と人と。誠文堂新光社。東京。pp. 287.

印牧美佐生（2014）：口之島野生化牛, The Journal of Animal Genetics, 42. 39-47.